



第七十七号

## 秋のコンサート便り

メルマガnoichi77号。今月のメルマガは「秋のコンサート便り」。  
今年は年末にかけて、まだまだ魅力あるコンサートが目白押しです。  
連日数え切れないほどの会が催される中、我らがメルマガnoichiでは、  
雅楽之一が出演する会を三つ取り上げ、御紹介をさせていただきます！

## ◎演奏会情報(出演曲)◎

### 「高橋翠秋・胡弓の葉」

日にち: 11月21日(火)

開場: 18時

開演: 18時30分

出演曲: おしどり・かくれ狐・夜の歌

### 「第二十回 福田栄香の会～稀曲の伝承～」

日にち: 12月4日(月)

開場: 18時

開演: 18時30分

入場料: 5千円

出演曲: 水の玉

### 「第十七回 曠の会」

日にち: 12月17日(日)

〈第一部〉

開場: 12時30分

開演: 13時

出演曲: 松竹梅

〈第二部〉

開場: 15時

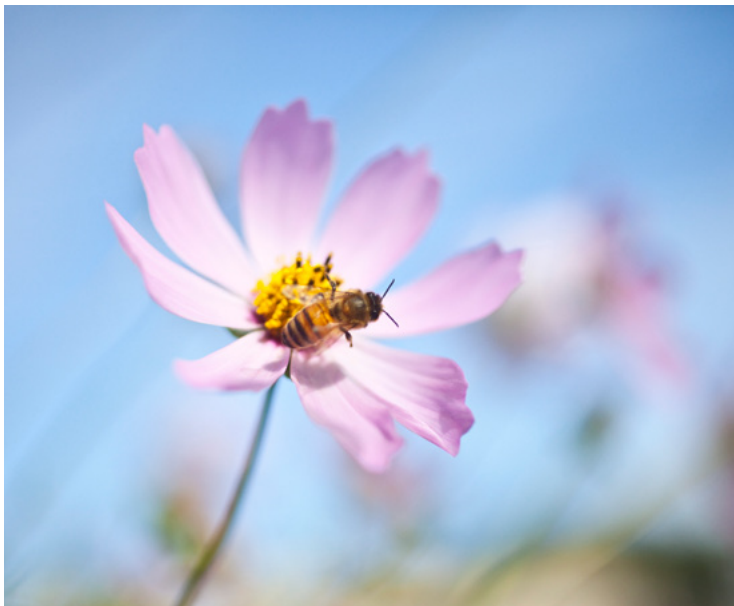
開演: 15時30分

出演曲: 竹生鳥

入場料: 各4千円 一部二部共通6千円

会場はいずれも、紀尾井小ホールとなります。

チケットご希望の方、お問い合わせ等ご興味ある方はメルマガ「noichi」に返信・ご連絡いただけますと幸いです。



↓次ページにつづく

今月のメルマガは、コンサートのご案内です。

いわゆる芸術の秋である九月から年末にかけては、私たち演奏家にとって大切なシーズンであり、流派、社中の大きな演奏会や個人のリサイタルなどが全国各地で沢山開催されます。今年は私も出演機会が多く、年末まで緊張の糸は張り詰めっぱなしになりそうです。私が最も成長できる季節でもありますので、先生方の胸を借りて、多くを勉強させて頂きたいと思っております。

さて、今月のメルマガでは、この秋に私が出演させて頂くコンサートの中でも、特にご案内したいオススメの演奏会を三つほど御紹介させて頂きます。日程順に御紹介させて頂きます。

一つ目は、十一月二十一日に開催される高橋翠秋(すい

しゅう)師のリサイタルです。翠秋先生は、箏曲界の第一人者であられた川瀬白秋(一九三〇～二〇一三)先生のご高弟で、白秋先生の代名詞でもあった地唄胡弓の真髄を伝承する貴重な演奏家です。この度、翠秋先生のリサイタルに初めて私が助演の大役を務めさせて頂くこととなりました。明治生まれの巨匠・久本玄智作品から一曲、中島靖子の歌曲作品から二曲を取り上げます。三曲とも胡弓のために書かれた作品ではありませんが、翠秋先生が胡弓の手付(編曲)をし、新しい試みとしてこの度演奏されます。当代随一の胡弓の演奏家であられますので、是非、この機会に秋の夜に響く哀愁の音色をご堪能頂ければと思います。

二つ目は、十二月四日に開催される二代目福田栄香(え

いか)師のリサイタルです。当代栄香先生のお祖母様に当たられる初代福田栄香(一八八七～一九六二)先生は、九州系地唄の先駆的役割を果たされた名人で、今日の箏曲界に大きな影響を残しておられます。又、お父様の福田種彦(一九二九～二〇〇三)先生は、昭和初期に生まれた現代の名人であり、残念ながら十五年前に他界されてしまいました。が、ほんとうに素晴らしい演奏家であられ、ご生前は私もファンの一員として追っ掛けをしていました。当代の栄香先生は、お二方の芸風を伝承される唯一の方であり、毎年開催されるリサイタルでは創意工夫をされ、お家芸の真髄を確と世に示しておられます。区切りの二十回目に当たる本年のリサイタルは「稀曲の伝承」と題し、お家に伝わる稀少な曲ばかりで演目が組まれております。福田先生のり



サイタルに出演させて頂くのは今回が初めてで、私が所属する正派には伝承されていない《水の玉》という曲の箏を奏させて頂きます。稀曲《水の玉》に関しては、私にも一つ思い出があります。かの宮城道雄先生が嘗てこの《水の玉》に箏の手付をしているのは知る人ぞ知る事実ですが、天下の宮城道雄が携わった作品にしては珍しく、後世に広く普及しなかったのが、現在その手を知る人は少なくなってしまうました。亡き私の恩師・森雄士先生は、《水の玉》を継承されていた数少ないお一人で、私は光栄にも、森先生からその貴重な手をお習いしたことがあります。尤も、今回演奏させて頂く《水の玉》は、宮城バージョンではなく福田バージョンなので、同じ曲ですが、全く違う手を演奏致します。いずれにせよ、大変な稀曲であると同時に、後世に残すべき名曲でもあると私は思います。良い機会になると思いますので、是非お運び頂ければと思います。

三つ目は、十二月十七日に開催される「曠(コウ)の会」の定期演奏会です。曠の会とは、第一線で活躍する中堅の山田流箏曲家と尺八演奏家の「男性のみ」で結成された有志の会です。私は生田流なので、同会のメンバーではありませんが、今年の定期演奏会は生田流の若手に山田流の曲を演奏してもらおうという大胆な発想によって企画され、私にまでお声が掛かりました次第です。今回、私は《竹生鳥》という曲を演奏致しますが、とても初心者向けとは思えない、非常に難易度の高い曲で、荷が重いです。私が山田流の曲を演奏する最初で最後の機会になるかもしれないので(笑)、こちらの会にも是非ご来場頂き、ご講評を頂ければ幸いです。

以上、順に御紹介をさせて頂きました。年末にかけて、読者の皆様にとってもお忙しい時節かと存じますが、ご都合でお越し頂ければ嬉しく存じます。毎月私のメルマガをご覧頂き、ありがとうございます。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

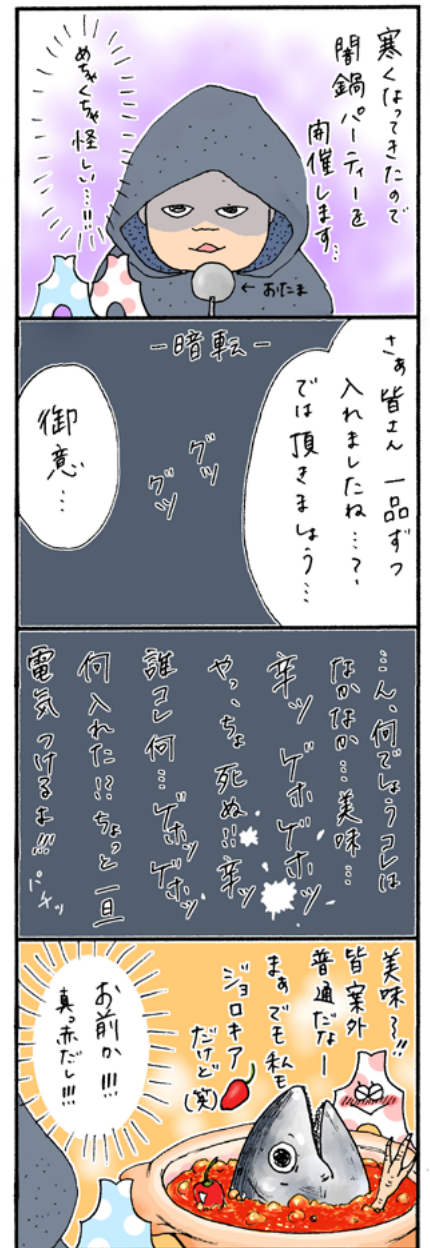


Illustration: morimoe



◎あとかぎ◎

毎年秋になると、読書の秋とか芸術の秋という言葉が聞くことになる。「読書の秋」というイメージの元になったのは、古代中国の韓愈が詠んだ「灯火親しむべし」(秋の夜長は明かりをつけての読書に適している)だという話だ。「芸術の秋」については、絵画の展覧会・日展・院展・二科展等が、秋に多くの美術公募展が開催されることから来ているという説がある。一九一八年(大正七年)九月二十一日の『読売新聞』には「読書の秋」が、同じ年の雑誌『新潮』三月号には「美術の秋」という表現があるそうだから、やはり新聞など戦前のマスコミのおかげと言えそうだ。

もつと古い根源的な理由を探して、人が洞穴で生活していたころを想像してみる。寒くなって来て、紅葉がきれいな時期になると、冬に向けての準備が始まる。木の実をたくさん食べて、残りを溜め込んで、余裕もでてくる。寒いから外に出ないで洞窟の奥に絵を描いてみようという人も出て来て、詩や歌が得意な人はたき火を囲んで、みんなの前で披露することもあっただろう。それが後に秋祭りに発展したのかもしれないと考えると、昔から収穫の秋は、アートの秋だったのかもしれない(あくまで自説です)。

グラフィックデザイナー <http://www.1938.jp> みやはらたかお

